

- ◆2024年1月24日発行ラインナップ◆
- ・節分の恵方巻から考える
  - ・初荷ののぼりをはためかせ

## 節分の恵方巻から考える

2024年の節分は立春の前日2月3日（土）。全国各地で豆まきをし、近年では恵方巻を食べるという風習が広がっている。恵方巻は、①その年の歳徳神がいらっしゃる恵方（2024年は東北東）を向いて食べる ②太巻き寿司は一人一本 ③切らずに食べる ④七福神にあやかり7種類の具が入った太巻きが望ましい ⑤恵方巻きを食べている途中で話をすると運が逃げていくので、願い事をしながら最後まで話をしないで食べる、等の大阪発祥の風習が広がったと言われている（諸説あり）。

ではいつから食べるようになったのか？

大正初期に縁起を担いで恵方に向かって海苔巻きを食べた大阪の風習を1932年大阪の鮪商組合がチラシを配布し販売促進をはかり、大阪を中心に広がった。更に戦後1973年大阪海苔問屋協同組合がチラシを作成し寿司屋での海苔巻きの販売をサポート。その後「海苔祭り」「巻き寿司早食い競争」デパートでの売り出しなどの催し物がマスコミに取り上げられ、1983年大手コンビニチェーンが大阪と兵庫で恵方巻の販売を開始、全国展開となり全国的に恵方巻を食べる風習が広がったと言われている。

太巻きではシイタケ、かんぴょう、高野豆腐、卵焼き、あなご、でんぶ、そして三つ葉が主な具材であるが、恵方巻では三つ葉に替わって噛み切りやすいキュウリが使われていることが多い。最近では海鮮や牛肉などデラックスな具材を使用した恵方巻も販売されている。太巻きは保存が難しく、売残った恵方巻が大量破棄されていることが報道されて以降、予約販売も増え、食品ロスを防いでいる。子供の日の柏餅や粽、クリスマスケーキなども行事が終われば販売が難しい食品であるが、食品の保存技術の発達や予約販売により食品ロスを防ぐ努力をしている。またお正月には欠かせない鏡餅は室内暖房の発達によりカビの繁殖で困っていたが、パック餅を利用した鏡餅の登場でカビ臭い餅を食べることも少なくなってきた。時代とともに日本の食文化はその形態を変化させながら受け継がれている。

一方、肥料も下肥や植物粕などの有機物から窒素・リン酸・カリを中心とした複合肥料、樹脂被膜肥料と製造技術の発達により変化しながら日本の食料供給、食文化の継承に大いに寄与してきた。しかし化成肥料原料の供給不安定さ・樹脂の殻による環境問題などに直面し、今後解決しなければならない課題も多い。

加えてトヨタのかんばん方式のようにジャストインタイムが実現できない肥料の生産を、せめて恵方巻やクリスマスケーキのように予約販売・売切れゴメンができればロスなく生産可能となるが、なかなかそのようにできない現実がある。工場の人手不足は深刻な問題で、化成肥料の銘柄削減は進みつつあるが「工場に常に在庫がないといけない」ということを見直す時期がくるのではないだろうか。

更に「有機」という言葉は環境に優しく感じられるが、家畜糞尿はじめ堆肥等は「臭い」が生産から施肥までついて回る大きな問題を抱えている。

新しい年を迎えた肥料業界だが、業界全体で知恵を出し合い様々な課題を解決しながら2023年より更に良い2024年にしたいものだ。

今年は東北東に向き、良い年になるよう願いを込めて恵方巻を食べましょう。



## ～初荷ののぼりをはためかせ～

「初荷（はつに）」とは新年の商いの始まりを祝い、一年の商売繁盛を願う大切なお正月行事の一つでした。「初荷」の歴史は古く江戸時代から始まり、当時は1月2日商家の仕事始めに行われたと言われています。また新調したはっぴや手ぬぐいを着用して問屋から小売商へ、小売商は大切な得意先へそれぞれ商品を届けます。馬が荷車をひいていたころは、馬を美しい鞍や綱で飾りたて華やかな気分を盛り上げる風習でもありました。その後も全国各地で「初荷」の風景が見られ、社歌を歌うなど賑やかに行われ祝い酒も用意されるなど様々なスタイルになっていきました。

東京・豊洲市場での「初荷」といえば、新春恒例マグロの初競りがあります。今年は4年振りに1億円の大台を超え、青森県大間産マグロが1億1424万円と昨年の初荷（3604万円）に比べ3倍以上の高値で競り落とされたのは記憶に新しいところです。

パナソニックホールディングス株式会社のホームページに掲載されている「松下幸之助の生涯の目次」46番目「初荷を挙げる1931年（昭和6年）」を引用させていただきます。【不況はますます深刻化し沈滞ムードは広がる一方である。所主は何とか市場に活気を呼び戻したいと考えていた。そんなある日、丁稚のころ近所の店に初荷の手伝いに行き、祝儀として手ぬぐいやお菓子を貰ったことを思い出した。そういえば初荷など久しく見たことがない。所主はこんなときこそ、景気付けに初荷でもやったらどうだろうかと考えた。たまたま昭和5年1月、名古屋支店で初荷をしたところ、非常に喜ばれた。所主は全国でもやろうと考え、昭和6年1月全国的行事として挙行した～途中省略～この初荷は正月恒例の行事として年々盛大に行われ、世間で松下の名物行事と呼ばれるほど話題を呼んだが、交通事情が悪化したため、昭和39年を最後に中止された】と記載あります。お正月といえば30年ほど前までは金融機関だけでなく、商店もお休みして、静かに新年を迎える風習がありました。現在では多くの商店や店舗が元日より営業してお正月も日常とかわらなくなり、行事の認識も薄れつつあるあるのかも知れません。

そんな薄れつつあるお正月の風景の一つである「初荷」の行事を続けている場面に出会いました。株式会社タカモト（社長：高本祥造様）と万来屋物産株式会社（社長：手島章宏様）の両社がご当地である福岡県久留米市において長い歴史を持つ肥料商です。今でも「初荷」の行事を続けており、本年も1月5日の仕事始めの日に行



われしました。肥料を積んだトラック荷台の両脇に「初荷」のノボリを掲げ、本社玄関を出発する場面を見送らせて頂きました。写真では少し見にくいですが、「初荷」のノボリと一緒に笹竹がついています。この笹竹には魔除けの意味も込められているそうです。

はためく「初荷」のノボりに今年一年の商売繁盛を願い肥料が積まれたトラックを送り出しました。（福岡支店）

先日、東京都心でも初雪を観測しました。雪の降る外気は体の芯から冷えていきますね。我が家の愛犬は私の布団の中で寝るので、毎晩天然湯たんぽとなり暖かくしてくれています。

編集事務局：田口、山内

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp

URL <http://www.mcagri.jp>